



吹屋坂は、犀川橋より十町許川上、泉野寺町へ上る坂なり。此の坂の上に鑄物師居て、吹屋場有りし故に名づけたりと聞ゆ。今は其の家絶えて久しきにや、知るものなしとぞ。或は云ふ。此の坂路をば俗に久字坂と呼べりと。此は鶴間谷をみうらや坂といへるにひとし。按ずるに、延寶の金澤圖に、寺町へ通ふ坂路は此の坂のみなり。自餘の坂路は延寶以後に付けたること知られけり。明治廿四年の春此の坂下に小橋を架け、同年の冬坂路を平均して道路を修繕し、往來の便宜しく成りたり。

○新坂

吹屋坂の西方なる坂路也。此の坂は、慶應元年に犀川蛤坂の道脇より新道を付け、河原を築き出し、新道を付けたる頃、坂路を開きたり。故に新坂と呼べり。

○山伏清立寺跡

其の遺蹟は、吹屋坂の登口にて、西側なる地なり。故に吹屋坂をば今清立寺坂とも呼べり。清立寺は、寶曆九年金澤火災記に、山伏清立寺木倉町と載せられたれば、寶曆の大火後に吹屋坂へ移住せしと聞ゆ。明治二年に復飾して村上主税

と改稱し、神職と成りたり。

○九峰隱室跡

其の地は、是も吹屋坂の登口にて、清立寺跡地の向う東側の地是なり。此の地は古來甚だ惡地なりと云ひ傳へたりとぞ。九峰は、小立野寶圓寺廿五世の住職にて、文化七年正月舊藩十一世太梁公薨逝の時導師を勤め、舊例に依り葬禮後退院して、此の地に隱室を造り、爰に隱居せり。金澤町會所留記に、文化十年七月町奉行前田清八の書面に如左記載す。

寶圓寺先住九峰、當時野田寺町地子地に被在之候へ共、格別之趣を以、右地面寶圓寺請地に被仰付候條、各様可引渡旨、今日御用番主膳殿被仰渡候。右御引渡方之儀被仰越候様致度候。以上。

七月廿一日

中村求之助様

前田清八

右の隱室は、文化十二年十月九峰連坐の出家等夫々處刑済の後、取毀ちて明地と成り居たり。

○寶圓寺前任九峰傳

九峰は、當國の出生にて、爲人聰敏、學識殊に勝れ、伶俐博學なるに依つて、寶圓寺廿五世の住職に擧せられ、中興の知職とて其の美名高く、禪家の模範ともなすべき高僧なりしかど、藩侯の導師を勤めし功勞に依りて、住職を退去し、隱室に休棲ありしより、如何なる天魔の見入りけん。曹洞宗開山以來の禁戒をも顧みず。隱室に於て酒宴肉食を專とするのみならず。藩士野村故忠兵衛の後室は、田邊佐五右衛門の妹にて、長操院と稱したるも、未だ落飾せず、容儀ある婦人なりし故にや、いつしか馴れ親み、隱室へ招き寄せて酒宴の相手となしたり。泉寺町香林寺の先住天苗は、九峰の弟子なるに依りて、是も九峰の隱室に來りて、宴席に交りけるが、其の事既に發覺せんとす。故に天苗、九峰に謂つて曰く、從來の事件は、悉く皆愚僧の所業となし、其の罪を愚僧引負ふべし。金子を賜はらば此の地を出奔すべしと。九峰も其の意に隨ひ、先づ出奔すべし。金子は必ず跡より送り遣すべしと云ふ。依つて天苗既に寺中を立退き、親類方に忍び居けるが、九峰は約束の金子も贈らず。却つて彼の婦人に益執着して、日夜隱室に於て酒宴を